新　報　（第三種郵便物認可）

自主防災組織100%目指し

地域リーダー研修会　自助・共助の重要性学ぶ

南三陸町

南三陸町で地域防災リーダー養成研修会

県危機対策課、南三陸町主催の地域防災リーダー研修会が十四日、同町役場会議室で開かれ、地震に関する基礎知識をはじめ、災害時の対応、自助・共助の重要性などを学んだ。同町では、二十二年度までに自主防災組織設置を一〇〇%にするよう取り組むなど、災害に強いまちづくりを進めており、研修会を通してその大切さを改めて習得した。

地域防災の中心となって実働する住民、企業、行政担当者を対象に、基礎知識や専門的手法など学んでもらおう－と開催したもので、行政区、企業、養護施設関係者ら約七十人が受講した。

特に、昭和三十五年のチリ地震津波で甚大な被害を受けた同町では、政策の柱に「安心安全なまちづくり」を位置付け、町挙げての防災訓練をはじめ、地域や学校ごとに研修会など重ね、災害に強いまちづくりを推進している。

二十二年度までには、全ての行政区に自主防災組織を設置し、自らの命や地域は自らで守るという意識を高めるとともに、環境を整えることにしている。

この日はまず、佐藤仁町長が「高い確率で県沖地震がやってくる。今後も災害に強いまちづくりを目指し、町民の意識向上に努力していく」とあいさつ。

次いで、日本防災士会県支部の保田真理さんが「地震のメカニズムと県沖地震で想定される被害」について講義した。

保田さんは、大きな地震は繰り返す－とし、①長期的に見ると地震は同一個所で何度も繰り返して発生②活断層地震は発生周期が非常に長く、予測がつかない③人の歴史より、地球の歴史がはるかに長い（人間の経験の及ばない過去にも大災害は繰り返して発生）－と指摘した。

県沖地震の想定される被害として、単独（海洋型）では建築物の全壊・大破棟数は五千四百九十六棟、半壊・中破棟数は三万八千七百一棟。死者数は九十六人、負傷者四千十四人。

一方、連動では七千五百九十五棟が全壊し、五万八百九十六棟が半壊。死者は百六十四人に達し、負傷者は六千百七十人にも上る－とした。

長町－利府線断層帯地震（内陸直下）になると、全壊は一万五千二百五十一棟、死者は六百二十人で、負傷者は一万千三人にも及ぶ－などと被害想定した。

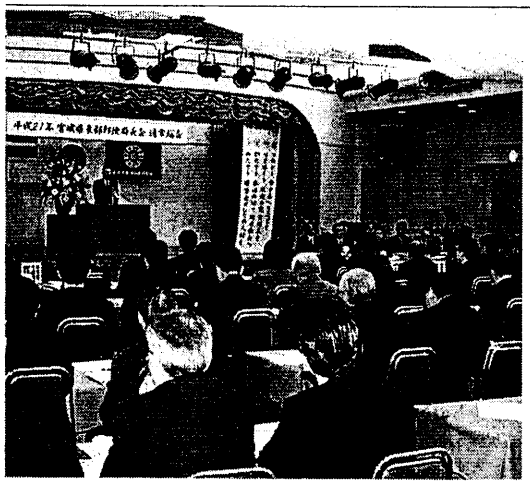
その上で、自らの命を守る「自助」、地域社会が協力してお互いを守る「共助」、行政が震災対策を実施する「公助」の重要性を訴えた。

このあと、同支部の高坂一憲さんの「地震に備えた防災手法」、NPO法人みやぎ災害救助ボランティアセンターの伊藤信一さんの「災害ボランティア」のあと、同支部の高橋則雄さんが災害をイメージした簡易な図上での訓練実習を行った。

地域に根ざした郵便局を

県東部局長会が総会

南三陸町



陸町で開かれた県東部郵便局長会

県東部郵便局長会（佐藤源一郎会長）の総会が十四日、南三陸ホテル観洋で開かれ、二十一年度事業計画・予算を決めるとともに、今後も地域に根ざした郵便局づくりに向けて結束することを誓った。

石巻、気仙沼、登米、南三陸、本吉各市町の郵便局長で組織する同会では、公園への植樹や国道、養護施設での清掃、支援物資の贈呈など環境美化や社会福祉に貢献。

今月九日には、南三陸町にAEDを贈り、喜ばれている。

総会では、佐藤会長が「地域に根ざし、貢献できる郵便局に向け、結束していこう」とあいさつ。次いで、祝辞では安住淳代議士が瞑想する国会情勢や郵政民営化に対する麻生総理の発言などを踏まえ、衆議院の早期解散を訴えた。

また、佐藤仁町長がAEDの寄贈に感謝するとともに、「地域と係わりながら業務を進めていただきたい」と祝辞を述べた。

議事では、①郵政事業の発展と魅力ある郵便局

宮城県北　わいど　えりあ　ニュ

車内いっぱい懐

三陸鉄道「歌声列車」で

三陸鉄道の支援事業を行っているNPO法人夢ネット大船渡（岩城恭治理事長）は先日、盛－釜石間でレトロ車両による「歌声列車」を運行。定員四十人を超える参加者で大いに盛り上がった。

昨年のお座敷列車での詩吟、謡曲、民謡の披露列車に続く企画で、岩城理事長が「沿線住民の足である三陸鉄道の経営をみんなで応援しましょ

祈った。

このあ

歌詞集を

の開演。

雨」など

したのど

披露され

〝歌声喫

なった。

途中、

弁当とタ

積み込ま

陸町特産

サービス